T. S. Eliot 研究

—Murder in the Cathedral における Becket の死の意義—

宮 野 祥 子

I

T. S. Eliot によるこの "Murder in the Cathedral" という劇は，多くの人によってさまざまな角度から研究されているが，大部分はこの劇を殉教者と世俗者との対立関係を通して，殉教者自身の苦悩と作者のある宗教的概念を強調しようとしたものであると述べている。例えば

> the play is a demonstration and expression of the "right reason" for martyrdom and, behind that, of the right doctrine of human life in general — orthodoxy. (註1)

というように殉教というものを肯定したものとしてこの劇を受けとめている。あるいは次の

> They (Becket and Hurry 筆者註) are agent of suffering in whom is made apparent the truth of particular religious conceptions. Their election to their destiny is the drama that Eliot presents, a drama that is at once intensely human and more than human, inhering in life and surpassing it in a divine plan. (註2)

In this first play Eliot turned immediately to what was to be the

central theme of almost all his plays —the role of the spiritually elect in society, the fructification of communal life by the example of the saint and the saintly. (註3)

The play, (中略), is not about 'murder in the cathedral' but about the spiritual state of a martyr facing death, the spiritual education of the poor women who are witnesses to his sacrifice, and the wilful opposition of secular to eternal power. (註4)

などからもわかるように，この劇の主人公である Becket が殉教者としての死を迎えたことは当然のこととして，その判断の上に立ってこの劇全体が考えられているのである。確かに Eliot 自身この劇について "I wanted to concentrate on death and martyrdom." (註5) と述べていることからも，この劇は Becket という人間を通して死と殉教というものを描がこうとしたものであるにちがいない。しかしそれがもしも多くの研究者の云うように単に死と殉教を通して Eliot のある概念を表わすのであれば，——それは多くの場合，人間の智恵を越えた概念であり人間の存在によっては，はかり知ることのできないものとされているのであるが，——この劇は単にカソリシズムの強調に終ることになってしまうであろう。

私が確かめてみたいのは，この劇における Becket の死は Becket という人間の，その存在の必然として起ってきた死であり，そして殉教を選ぶということにおいて，人間の限界を越えようとするまでに自己の存在を追求しつづけた Becket の姿である。

劇中 Becket は暗にキリストを指し示すものとしての設定がなされている。それにより，多くの研究者は Becket がキリストと同じ役目をはたすものであると述べている。例えば

Atonement is symbolized by Becket. As martyr in Part Ⅱ, Becket

is a type of Christ, (中略) Becket, like Christ, is tested, slain, and exalted, not for his sin but for other men's. (註6)

といわれる如くである。しかしながら，もし Becket がキリストと等質的存在であるならば Part I の大部分を占めている Tempters との対話は何を意味することになるのであろうか。そしてまた人間である Becket に人間を超越したことがらを Eliot は期待したのであろうか。

歴史的人物である Becket を，そしてカソリックの世界では殉教者であり Saint であると云われている Becket を素材として，Eliot がこの劇において形象化した Becket は，はたしてどのような意味を持っているのであろうか。これらの問題を解明するにあたり，つぎの三点を中心として進めてゆきたい。その第一点は Becket を中心として，Tempters との対話から劇中の説教を通して，死に到るまでの間に形象化されている Becket の人間像の追求から，第二点はその Becket の姿にからみ合わされて，さまざまに変化しながら "witness" としての機能をはたしている Chorus の反応を中心とするものであり，第三点はそれらの底流となっているテーマの解明である。それには Tempters と Knights の機能もあわせて考える必要があるが，まずこの小論においては第一の Becket を中心とした問題点に焦点をあわせて考えてみたい。使用テキストは T. S. Eliot: Murder in the Cathedral (Faber and Faber Ltd 第四版) である。

II

Eliot はこの劇の筋書を

A man comes home, foreseeing that he will be killed, and he is killed. (註7)

と述べている。具体的には何か事件が起るという Chorus の予告で劇が

始るわけであるが，Chorus の機能については稿を改めて考察することにして，ここでは Becket に関することのみを追って論を進めることにする。

最初の Becket の登場は，彼の亡命先であるFrance から突然帰ってくるという知らせをもって登場する Messenger によってもたらされる。彼は Becket の様子を次の如く告げている。

He comes in pride and sorrow, affirming all his claims,
Assured, beyond doubt, of the devotion of the people,
Who receive him with scenes of frenzied enthusiasm,
Lining the road and throwing down their capes,
Strewing the way with leaves and late flowers of the season.
The streets of the city will be packed to suffocation,
And I think that his horse will be deprived of its tail,
A single hair of which becomes a precious relic. p. 15

これは明らかにキリストのエルサレム入城を模倣したものであり，民衆の Becket を迎える有様は

And many spread their garments on the road, and others spread leafy branches which they had cut from the fields. And those who went before and those who followed cried out, "Hossana! Blessed be he who comes in the name of the Lord!

(Mark 11 : 8 − 9)

の如くキリストのそれと非常に類似しているのである。これは Becket が民衆にとってキリストと同じ役目をする人間として期待されている存在で

あることをあらわしていると考えられる，と同時に Becket 自身はキリストの栄光に自らがふさわしいと認めていることをあらわしていると考えられる。このことは Becket が Chorus に向って最初に云うことばからも明らかである。

They know and do not know, that action is suffering
And suffering is action. Neither does the agent suffer
Nor the patient act. But both are fixed
In an eternal action, an eternal patience.
To which all must consent that it may be willed
And which all must suffer that they may will it,
That the pattern may subsist, for the pattern is the action
And the suffering, that the wheel may turn and still
Be forever still. p. 21

全人間の存在は常に，ある永遠につながる "action and suffering" によって支えられているものである。それは選ばれたる者の "action and suffering" である。同時にそれは永遠につながるものであるが故に，生の大車輪を動かすものでありながら永久にある静止点，つまり唯一つの真実なるものを示すのである，と Becket は云う。ここには自らの存在が実は選ばれたものであり永遠なるものに連なっていることの暗示がある。それは Tempter に対して云うことば

We do not know very much of the future
Except that from generation to generation
The same things happen again and again. (中略)
But in the life of one man, never

The same time returns. (中略)
The fool, fixed in his folly, may think
He can turn the wheel on which he turns. p. 25

からも明らかであろう。つまり Becket は自己の存在と死を通して，ある一つの真理が示されることを信じていたのである。従って彼には

End will be simple, sudden, God given.
Meanwhile the substance of our first act
Will be shadows, and strife with shadows.
Heavier the interval than the consummation.
All things prepare the event. p. 23

と自己の行為が最初は実体のないものであっても，いづれは完成され成就するものであると言い得ることが可能であった。そしてこれから後に起ることは，すべてあることがらの準備であると云い得るとき，彼の自己認識がいかなるものであるのかが自ら明確になるのである。Becket はひそかにキリストを模倣し，神の名において死を選ぶことにより，その栄光を望んでいたと考えられる。

"All things prepare the event" (p. 23) のことば通り次に Becket は Four Tempters を迎える。この Tempters は彼らに向って Becket が，

I expected you. p. 30

と云うことからも期待されるべくして登場する存在であることが理解されよう。ここにおいても Becket の Temptation が彼にとって必然のもの

であったことが明らかである。このことは，

partly because of Eliot's reading of the invisible Fourth Tempter's lines, （註8）

というようにこの劇を映画において演出するとき， Tempter を登場させず声のみで表現することも可能であるということからも明らかである。Tempters の発言は Becket の内的な葛藤をあらわしているものといえるし，彼の心的状況の投影であると考えることもできるのである。従って根底には先に述べたごとく，この内的な葛藤を経てのちにある出来事は完成されるという Becket 自身の期待が潜んでいることに注意しなければならない。次に Becket が自らにいかに問いかけ，応答しつつ決断するに到ったかをみつめてみたい。

First Tempter はまず

What, my Lord, now that you recover
Favour with the King, shall we say that summer's over
Or that the good time cannot last? （中略）
Now that the King and you are in amity,
Clergy and laity may return to gaicty,
Mirth and sportfulness need not walk warily. p. 24

と，昔のように現世の歓楽にふけることを誘う。それに対して Becket は

We do not know very much of the future
Except that from generation to generation

The same things happen again and again. p. 24
But in the life of one man, never
The same time returns. p. 25

と答える。これは上記の生の大車輪の概念につながるものである。人間はいつも未知なる時に向って生き続けるのであると云うとき，Becket にとってはその未来というものは自分で選びとるのではなく与えられているものであるという認識に立っているのである。だから昔の如く王にとり入って現世の歓楽にふけることはしなくてよい，という判断がなされている。しかしながら，First Tempter の立去ったあと

The impossible is still temptation.
The impossible, the undesirable,
Voices under sleep, waking a dead world, p. 26

という Becket は歓楽そのものに打勝ったのではなく，人間は二度と同じことをくり返さないのであるからという選ばれたる者の自負心の故にその誘いにのらなかったということを明らかにしている。このことから First Temptation そのものが Becket の心の中から取り去られたのではなく単に否定のための否定がなされたことがわかるのである。次いで彼が

So that the mind may not be whole in the present. p. 26

というときに，"the event" のためにはこのような誘惑（葛藤）が必要であり，それを経て完全なものに到るという考えを表わすものである。従ってこの Temptation をしりぞけることにより，Becket にとっては逆に人間として，そしてこの場合は，キリストにより近い存在として，完成されていくという考えをあらわすものなのである。

Second Tempter は

You, master of policy
Whom all acknowledged, should guide the state again, p. 26
Power is present. Holiness hereafter. (中略)
To set down the great, protect the poor,
Beneath the throne of God can man do more? (中略)
Rule for the good of the better cause, p. 27
Real power
Is purchased at price of a certain submission.
Your spiritual power is earthly perdition.
Power is present, for him who will wield. p. 28

と王に服従することにより，大法官の権力を再び得てこの世の権力を得よと誘う。Becket の返答は

No! shall I, who keep the keys of heaven and hell, supreme alone in England,
Who bind and loose, with power from the Pope,
Descend to desire a punier power?
Delegate to deal the doom of damnation,
To condemn Kings, not serve among their servants,
Is my open office, No! Go. p. 30

である。ここにおいても彼は First Tempter に対した時と同様，この世の権力を否定することによって誘惑そのものを否定することはしていないのである。ただ自分は England において "supreme alone" であるとい

う誉りの故に，小さなこの世のみを支配する権力のために，王の臣下にはなれないというだけである。これは真の意味での誘惑の否定ではなく明らかに否定のための否定である。また続いて彼が

Temporal power, to build a good world,
To keep order, as the world knows order.
Those who put their faith in worldly order
No controlled by the order of God,
In confident ignorance, but arrest disorder,
Make it fast, breed fatal disease,
Degrade what they exalt. p. 30

という時，Becket 自身が誉りに思い，守りつづけている権力，England における最高者としての権力も，実は人間である法王 Pope から与えられたものであり，所詮は人間から人間に与えられたこの世の秩序の中にある権力，"breed fatal disease" なるものでしかないことに気づき得ていないのである。ここにも自分のみは，永遠なるものにつながっているという，人間としての自負心がうかがわれるのである。

次いで地方貴族である Third Tempter は

This is the simple fact!
You have no hope of reconciliation
With the Henry the King. p. 32
For us, Church favour would be an advantage,
Blessing of Pope powerful protection
In the fight for liverty. p. 33

Church and people have good cause against the throne. p. 34

と王との和解は不可能であるから，新しい政権を教会と貴族で打立てよと誘う。 Becket はそれに対して

Shall I who ruled like an eagle over doves
Now take the shape of a wolf among wolves?

と答える。 "an eagle" とは過去の Becket の権力を示すものであり，"doves" とはその権力のまえにぬかづいた貴族たちのことである。ここでは Becket は昔の自分に対する誉りの故に， Second Temptation の場合と同様，自分の足もとに居た人間と等しくなり，群狼の仲間に入ることをさけるのである。この場合もやはり王に逆うということをさけるのではなく，自分に対する誉りの故に，つまりは自己の完全さに対する執着の故に誘惑をさけることができたということができよう。さらに

If the Archbishop cannot trust the Throne,
He has good cause to trust none but God alone. p. 34

ということばから，王でなければ神を，という選択がなされているのは確かである。ということはこの世の権力者である王と神とを比較することであり，結果的に神を選んだとしてもそれはこの世における神という名の権力を選んだのにすぎないのである。つまり彼は自己の保身のための選択をなしたにすぎないのである。

Third Tempter が去ったあとでの Becket の
To make, then break, this thought has come before,

The desperate exercise of failing power. p. 34

ということばは，この Temptation が彼自身の心の葛藤であることを示すと同時に，この世において弱められてゆく自分の権力を回復しようとする試みであることを示している。それは同時に Becket にとってはキリストに近づく手段であると判断されたものであるので，彼自身の誉りの故にすべての試みがしりぞけられてしまった後，当然 Becket にとっては，

If I break, I must break myself alone. p. 34

と，自己を犠牲にすることのみが，つまりキリストの栄光を受けるという死のみが，彼の誉りにふさわしいものとして確かめられるに到るのである。

ところが

Who are you? I expected
Three visitors, not four. p. 35

という Becket のことば通り，彼の予期しなかった Fourth Tempter があらわれる。

この Tempter は Becket に

You hold the keys of heaven and hell. (中略)
bind, Thomas, bind,
King and bishop under your heel.
What can compare with glory of Saints.
Dwelling forever in presence of God? (中略)
Seek the way of martyrdom, make yourself the lowest
On earth, to be high in heaven. p. 39

と Saint としての栄光を求めよと誘う。これに対して Becket は初めて自らの望みが,

You only offer
Dreams to damnation, p. 39

と，地獄に到る道でしかないことに気づくのである。それは

The last temptation is the greatest treason :
To do the right deed for the wrong reason. p. 44

と云う如く神に対する大それた反逆なのである。

Is there no way, in my soul's sickness,
Does not lead to damnation in pride?
I well know that these temptations
Mean present vanity and future torment.
Can sinful pride be driven out
Only by more sinful? Can I neither act nor suffer
Without perdition? p. 40

という Becket のことばは彼の存在が破滅にしか通じていないことの認識を示すものと考えられる。"present vanity" はこの世における栄光，つまり最初の三人の誘惑者によってもたらされた栄光であり，"future torment" とは神への冒瀆に対する罰をあらわしていると考えられる。

これら4つの誘惑を通して，Becket という人間にとっては，"act" することも "suffer" することも即ち罪に連らなっているということが明らかにされたわけである。換言すれば人間は自らに対する誉りの中にしか，

あるいは自己に執着せずには生きつづけることができない存在である。その本質は死につらなっているということも表わされているということができよう。

次にこの Temptation を聖書における誘惑と比較してみたい。 Luke 4を引用してみると

4 : 3

The devil said to him, "If you are the Son of God, command this stone to become bread."

4 : 4

And Jesus answered him, "It is written, 'Man shall not live by bread alone.'"

4 : 6 - 7

and said to him, "To you I will give all this authority and their glory; for it has been delivered to me, and I give it to whom I will. If you then, will worship me, it shall be all yours.

4 : 8 - 11

And Jesus answered him, "It is written, 'You shall worship the Lord your God, and him only shall you serve,'"

4 : 9

"If you are the Son of God, throw yourself down from here; for it is written, 'He will give his angels charge of you, to guard you,' and 'On their hands they will bear you up, lest you strike your foot against a stone.'"

4 : 12

And Jesus answered him, "It is said, 'you shall not tempt the Lord your God.'"

の如く非常に Becket の Temptation の内容がキリストのそれと類似していることが明らかである。Becket の First Temptation はキリストのパンの問題と同質のものであり，Second と Third の Temptation はキリストの第二の誘惑であるこの世の権威と栄華への誘いと同じものである。さらに最後の殉教者たることにより神の栄光を，という Temptation はキリストに対する最後の，神の証しを求めよという誘惑と同質のものである。しかしながら Becket はやはり人間でしかあり得ないことが明らかである。何故ならば，誘惑に対する返答は，キリストの場合は全て，旧約聖書における神のことばでなされたのに対して，Becket は既に述べた如く常に自らの意志を基として，自己の立場と自己に対する誉りの故に誘惑をしりぞけたのにすぎなかった。ということは，キリストにとっては常に神の意志が自らのそれであるのに対して，Becket は常に自己の追求のみに終っているのである。それは自我のみに生きる自律的人間でしかあり得ないことの表明である。「アダムは彼が生命の樹から果実をとった時に，宗教的，倫理的意味における最初の「自律的」人間であった。それ故人間が新しい力を呼び起し得るのに自分の小さな自我以外持たなくなったのである。」（註9）という意味において，Becket は人間としての典型的存在をなしていると考えられる。

Ⅲ

Ⅱにおいて確かめてきたように Becket は人間以外の何ものでもなく，"act" することも "suffer" することも所詮は罪を深めるにすぎない存在でしかないことが明らかになった。しかしながら Becket は最初彼が Chorus に向って云ったことばを Fourth Tempter によって

You know and do not know, what it is to act or suffer.
You know and do not know, that action is suffering,

And suffering action. Neither does the agent suffer
Nor the patient act. But both are fixed
In an eternal action, an eternal patience
To which all must consent that it may be willed
And which all must suffer that they may will it,
That the pattern may subsist, that the wheel may turn and still
Be forever still. p. 40

と繰返して云われることにより，破滅にしか導かない彼自身の存在も永遠のあるものに連なっていると判断するときに，その存在理由を自分を超越したところに求めることにより，自らの存在が罪なるものであることの理由を永遠なるものの側においた。だから

I shall no longer act nor suffer, p. 45

と自己否定することにより，逆に Fourth Temptation に打勝ったと判断した。つまり自己の罪なる存在の理由を人間を超越したものに求めることにより，自らは破滅に導びく "act" も "suffer" も行なわないので罪には堕ち入らなかったと判断したわけである。

Now my good Angel, whom God appoints
To be my guardian, hover over the swords' points. p. 45

と自らを肯定することができたのもその判断に立脚することにより可能であった。

ここに到って Becket の罪認識はあくまでも自分は選ばれた人間であるという考えに基づくものであるということができよう。それは逆に自己に

対する肯定の気持を守り続けなければ生きられない人間であることの表明でもあると考えられる。

この点に関して Carol H. Smith は

> Thomas is saying, in effect, that having endured his temptations and having reaffirmed submission to God's will and the divine pattern, he has moved beyond action and suffering, (註10)

と述べている。しかしながらもし人間が自らに関して，行為することも苦しむこともないと云うならばその人間は最早，人間としての存在を自ら放棄した場合か，あるいは超自然的な力を持っていると錯覚している場合でしかないはずである。

また Grover Smith, Jr. によれば

> he explains that this temptation sprang from his will for good. (中略) Only by extinction of self-will can he avoid the mortal sin of pride at his moment of sacrifice. (中略) Henceforth he will not act, for God will act through him; he will not suffer, for God will empower him to consent. He has made a "decision," he says, later, "To which my whole being gives entire consent," a decision taken "out of time." (註11)

といわれている。これは Becket が "self-will" を神の意志と一致させることができるという認識の上に立った意見あり，その瞬間において Becket は人間であることを抹殺されてしまっているのである。そして仮りにこの説を肯定するとすれば，この劇はプロパガンダでしかあり得ないであろう。Ⅱにおいて述べた如く，あまりにも人間的な存在として形象化されて

いる Becket の姿が単なるある宗教的概念の embodiment であり得ようか。

Part I と Part II の間に Becket の説教がある．そのなかで彼は殉教について

> A Christian martyrdom is never an accident, for Saints are not made by accident. Still less is a Christian martyrdom the effect of a man's will to become a Saint, as a man willing and contriving may become a ruler of men. A martyrdom is always the design of God, for His love of men, to warn them and lead them, to bring them back to His ways. It is never the design of man; for the true martyr is he who has become the instrument of God, who has lost his will in the will of God, and who no longer desires anything for himself, not even the glory of being a martyr. p. 49

と述べている。この内容はもしこの "martyr" ということばのかわりに Christ を用いるならばそのままキリスト教の神の愛を教える内容となろう。そして説教の最後で

> I do not think I shall ever preach to you again; and because it is possible that in a short time you may have yet another martyr, p. 50

と述べるときに，Becket が神を自らの側にひきつけていることに気づくのである。暗に自らの死を "martyr" であると予告しつつ，自らは神の御意を行う道具でしかないと認めることにより，逆に自己の存在を正当化し肯定しているのである。人間が自らの意志を神のそれと一致させ得ると判断したときに，人間は人間に可能である最大の自己肯定をなしたことになろう。それは最も自律的な人間の姿であり，同時に人間の人間であること

を表わす姿であるとも云えるのである。

Ⅳ

今までに述べてきた如く Becket の存在が人間的なもの以外の何ものでもないことが明らかになれば，Becket の具体的な死に対して，Becket 自身がいかなる美名を与えて，"martyr" として肯定をしようとも，それは自己に対する執着を深めるだけのことである。本論においては論述しなかったところであるが Becket の Knignts に対する弁明も，死をこばまずに迎えた Becket の態度も，この小論において確かめてきた Becket を前提としているからには，あくなき自己追求の結果として，Becket の死の意味を考えることができよう。

この Becket の姿はⅠで述べた如くさまざまの角度から検討されなければならないが，結局のところ，この劇における Becket の死は人間であるが故に，すべてのことを利用しつつ自己追求し，その結果人間としての限界を越える極限にまで自らを高めようとした人間の悲劇を表わしているということができよう。

註1　Francis Fergusson, *The Idea of a Theater* (1949)　p.223

註2　Ronald Peacock, *The Poet in the Theatre* (1960)　p. 6

註3　D. E. Jones, *The Plays of T. S. Eliot* (1960)　p.50

註4　Grover Smith, Jr., *T.S. Eliot's Poetry and Plays* (1961)　p.181

註5　T. S. Eliot, *Poetry and Drama* (1950)　p.25

註6　註4に同じ　p.186

註7　註5に同じ　p.25

註8　註4に同じ　p.181

註9　カール・アダム，カトリシズムの本質　霜山徳爾訳　p.46

註10　Carol H. Smith, *T. S. Eliot's Dramatic Theory and Practice* (1963)　pp.96—97

註11　註4に同じ　p.190